

調査結果の概要

発 育 状 態

1 身長・体重の平均値

令和2年度及び令和元年度の幼稚園、小学校、中学校、高等学校における幼児、児童及び生徒の身長・体重の平均値を年齢別にみると、表1のとおりである。

表1 年齢別、身長・体重の平均値

区 分		身 長 (cm)				体 重 (kg)			
		男		女		男		女	
		R 2	R 元	R 2	R 元	R 2	R 元	R 2	R 元
幼 稚 園	5 歳	111.5	110.0	110.5	109.5	19.5	19.0	19.1	18.6
小 学 校	6 歳	116.6	116.4	116.1	115.9	21.7	21.4	21.4	21.4
	7	122.7	122.3	121.2	121.3	24.6	24.0	23.7	23.5
	8	128.2	127.8	127.5	127.3	27.9	27.4	26.9	26.8
	9	133.0	133.3	133.5	133.1	30.8	30.7	30.6	30.2
	10	139.1	138.6	139.8	140.2	35.5	34.1	34.5	34.5
中 学 校	11	145.2	145.2	147.3	146.6	38.7	39.5	40.0	39.9
	12歳	151.9	152.2	151.7	151.5	44.3	45.0	45.2	44.6
	13	159.7	159.2	154.4	154.4	49.4	49.5	48.1	47.8
高 等 学 校	14	165.1	164.9	155.8	155.8	54.9	53.7	50.6	50.0
	15歳	167.5	167.5	156.3	156.4	58.7	58.1	51.8	51.9
	16	168.3	169.6	157.9	157.1	60.3	61.4	53.9	54.1
	17	169.5	170.2	156.5	157.1	62.2	62.8	52.8	52.9

令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、他の年度と測定時期が異なっているため、過去の数値と単純比較することはできない。

(1) 身長

男子の身長は、5歳で111.5cm、11歳で145.2cm、14歳で165.1cm、17歳で169.5cmとなっており、5歳～8歳、10歳、13歳、14歳の各年齢で前年度より伸びている。

なお、各年齢間の身長差は12歳と13歳の間(7.8cm)が最も大きく、15歳と16歳の間(0.8cm)が最も小さい。

女子の身長は、5歳で110.5cm、11歳で147.3cm、14歳で155.8cm、17歳で156.5cmとなっており、5歳、6歳、8歳、9歳、11歳、12歳、16歳の各年齢で前年度より伸びている。

なお、各年齢間の身長差は10歳と11歳の間(7.5cm)が最も大きく、14歳と15歳の間(0.5cm)が最も小さい。

9歳～11歳で女子の身長は、男子の身長を上回っている。

(2) 体重

男子の体重は、5歳で19.5kg、11歳で38.7kg、14歳で54.9kg、17歳で62.2kgとなっており、5歳～10歳、14歳、15歳の各年齢で前年度より増えている。

なお、各年齢間の体重差は11歳と12歳の間(5.6kg)が最も大きく、15歳と16歳の間(1.6kg)が最も小さい。

女子の体重は、5歳で19.1kg、11歳で40.0kg、14歳で50.6kg、17歳で52.8kgとなっており、5歳、7歳～9歳、11歳～14歳の各年齢で前年度より増えている。

なお、各年齢間の体重差は10歳と11歳の間(5.5kg)が最も大きく、16歳と17歳の間(-1.1kg)が最も小さい。

11歳、12歳で女子の体重は、男子の体重を上回っている。

令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、他の年度と測定時期が異なっているため、過去の数値と単純比較することはできない。

2 身長・体重の推移

(1) 身長の推移

身長の推移をみると、表2のとおり、男女ともここ数年ほぼ横ばい傾向を示している。

親の世代である約30年前(平成2年度)と比較すると、表2の年齢区分では、男子の身長は、6歳で0.2cm、11歳で1.8cm、14歳で1.4cm高く、17歳で0.6cm低くなっている。

女子の身長は、6歳で0.6cm、11歳で1.1cm高く、14歳で0.3cm、17歳で1.2cm低くなっている。

表2の年齢区分で全国と比較すると、令和2年度では、男子の身長は、6歳で0.9cm、11歳で1.4cm、14歳で1.0cm、17歳で1.2cm低くなっている。

女子の身長は、6歳で0.6cm、11歳で0.7cm、14歳で0.9cm、17歳で1.4cm低くなっている。

図1【身長】男女の比較

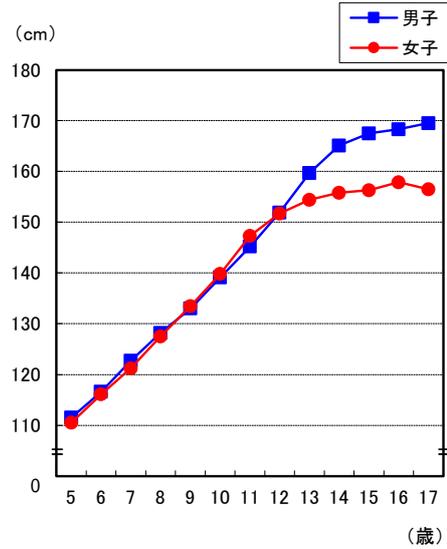
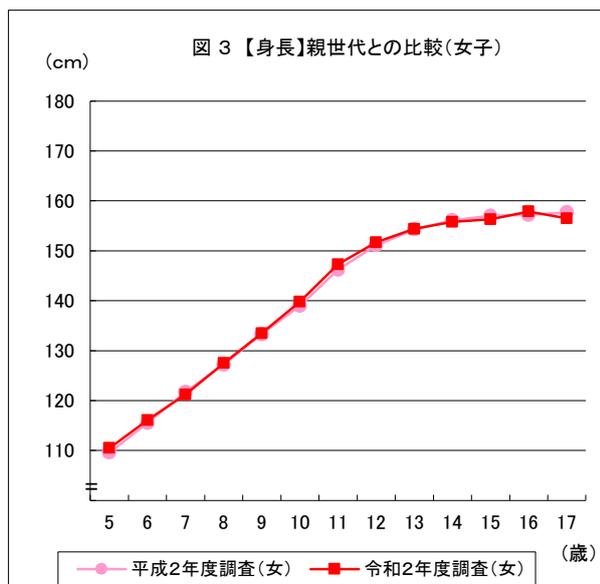
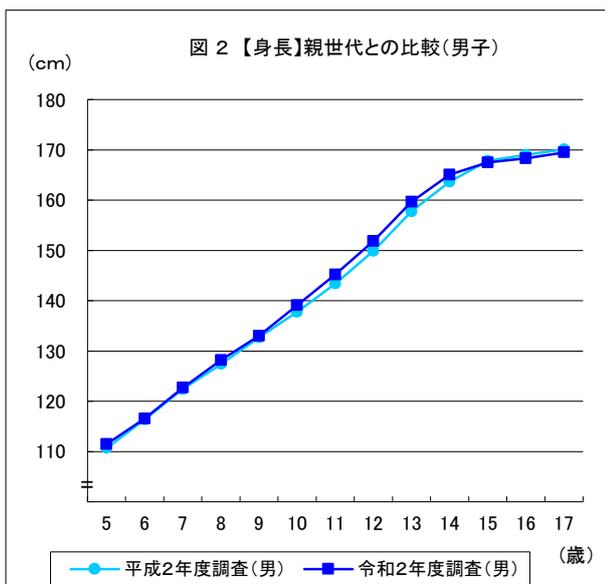


表2 身長の推移

(単位：cm)

区分	佐賀県							
	男				女			
	6歳	11歳	14歳	17歳	6歳	11歳	14歳	17歳
平成2年度	116.4	143.4	163.7	170.1	115.5	146.2	156.1	157.7
平成12	116.3	144.8	164.7	170.4	115.8	146.6	156.4	157.7
22	116.3	145.0	164.8	170.6	115.9	146.8	156.4	157.2
27	116.5	144.9	165.2	171.0	115.9	146.9	156.2	157.4
28	116.3	144.6	165.2	170.7	115.2	146.8	156.4	157.0
29	116.2	145.3	164.8	171.0	115.6	147.0	156.2	157.5
30	116.4	144.9	164.9	170.1	115.3	146.4	155.9	157.5
令和元	116.4	145.2	164.9	170.2	115.9	146.6	155.8	157.1
2	116.6	145.2	165.1	169.5	116.1	147.3	155.8	156.5
区分	全国							
	男				女			
	6歳	11歳	14歳	17歳	6歳	11歳	14歳	17歳
平成2年度	116.8	144.4	164.5	170.4	116.0	146.3	156.4	157.9
平成12	116.7	145.3	165.5	170.8	115.8	147.1	156.8	158.1
22	116.7	145.0	165.1	170.7	115.8	146.8	156.5	158.0
27	116.5	145.2	165.1	170.7	115.5	146.7	156.5	157.9
28	116.5	145.2	165.2	170.7	115.6	146.8	156.5	157.8
29	116.5	145.0	165.3	170.6	115.7	146.7	156.5	157.8
30	116.5	145.2	165.3	170.6	115.6	146.8	156.6	157.8
令和元	116.5	145.2	165.4	170.6	115.6	146.6	156.5	157.9
2	117.5	146.6	166.1	170.7	116.7	148.0	156.7	157.9

令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、他の年度と測定時期が異なっているため、過去の数値と単純比較することはできない。



年間発育量

平成14年度生まれ（令和2年度17歳）の年間発育量をみると、表3のとおり男子では11歳時、女子では8歳～10歳時に最大の発育量を示しており、最大発育量を示す年齢は、女子の方が男子に比べ3歳早くなっている。

また、この発育量を親の世代（平成2年度17歳）と比較すると、男子では発育量が最大となる時期は親の世代より1歳早く、5歳、6歳、8歳、11歳の各歳時で親の世代を上回っている。

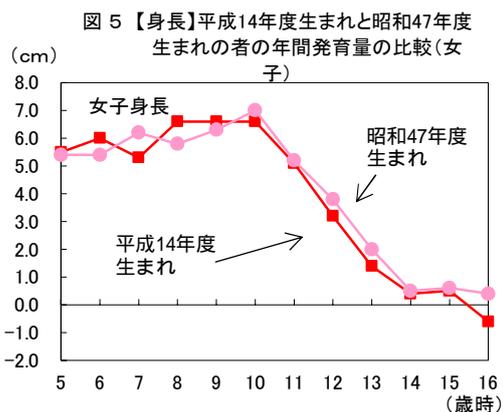
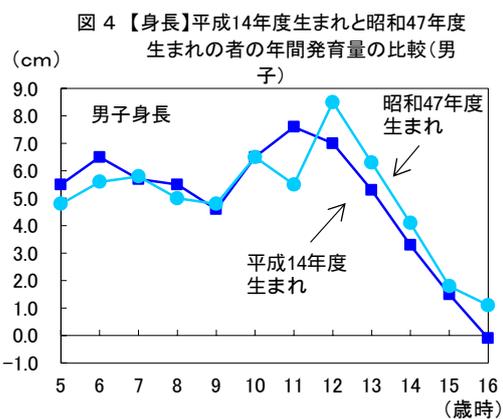
女子については、発育量が最大となる時期は親の世代より2歳早く、5歳、6歳、8歳、9歳の各歳時で親の世代を上回っている。

表3 【身長】平成14年度生まれと昭和47年度生まれの者の年間発育量の比較

(単位: cm)

区分	男子		女子	
	平成14年度生まれ (令和2年度17歳)	昭和47年度生まれ (親の世代の17歳)	平成14年度生まれ (令和2年度17歳)	昭和47年度生まれ (親の世代の17歳)
総発育量	58.9	-	46.6	-
幼稚園	5歳時	5.5	4.8	5.5
小学校	6歳時	6.5	5.6	6.0
	7	5.7	5.8	5.3
	8	5.5	5.0	6.6
	9	4.6	4.8	6.6
	10	6.5	6.5	6.6
中学校	11	7.6	5.5	5.1
	12歳時	7.0	8.5	3.2
	13	5.3	6.3	1.4
高等学校	14	3.3	4.1	0.4
	15歳時	1.5	1.8	0.5
	16	-0.1	1.1	-0.6

注) 年間発育量とは、例えば、平成14年度生まれの5歳時の年間発育量は、平成21年度調査6歳の者の身長から平成20年度調査5歳の者の身長を引いたものである。



(2) 体重の推移

体重の推移をみると、表4のとおり、男女ともここ数年ほぼ横ばい傾向を示している。

親の世代である、約30年前(平成2年度)と比較すると、表4の年齢区分では、男子の体重は、6歳で0.4kg、11歳と14歳で2.2kg、17歳で1.3kg重くなっている。

女子の体重は、6歳で0.6kg、11歳で1.8kg、14歳で0.9kg、17歳で0.4kg重くなっている。

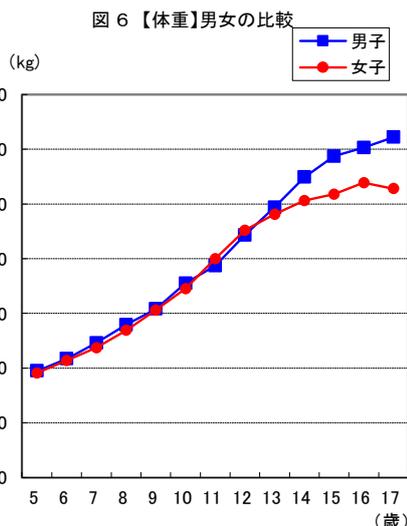


表4の年齢区分で全国と比較すると、令和2年度では、男子の体重は、6歳で0.3kg、11歳で1.7kg、14歳で0.3kg、17歳で0.4kg軽くなっている。

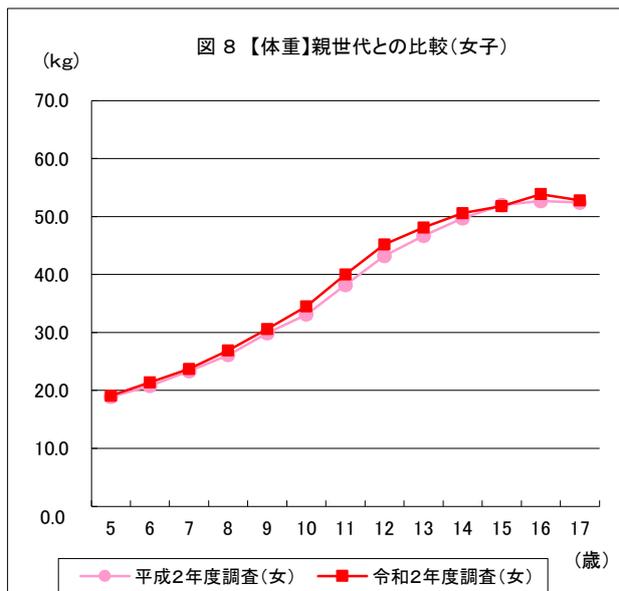
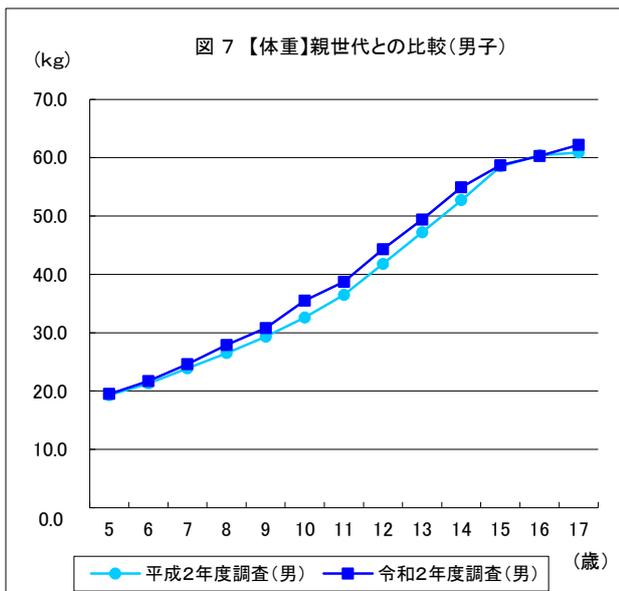
女子の体重は、6歳で0.1kg、11歳で0.3kg軽く、14歳で0.4kg、17歳で0.5kg重くなっている。

表4 体重の推移

(単位: kg)

区分	佐 賀 県							
	男				女			
	6歳	11歳	14歳	17歳	6歳	11歳	14歳	17歳
平成2年度	21.3	36.5	52.7	60.9	20.8	38.2	49.7	52.4
平成12	21.3	38.6	54.3	62.3	21.1	39.9	50.7	53.3
22	21.4	38.2	54.4	63.9	21.0	39.4	50.5	52.8
27	21.4	37.8	54.2	63.0	21.2	39.2	50.4	54.3
28	21.3	38.0	54.2	63.1	20.7	39.6	50.1	53.0
29	21.3	38.7	53.9	63.8	21.2	39.9	51.1	53.6
30	21.3	38.3	53.4	62.3	21.1	38.8	50.2	53.3
令和元	21.4	39.5	53.7	62.8	21.4	39.9	50.0	52.9
2	21.7	38.7	54.9	62.2	21.4	40.0	50.6	52.8
区分	全 国							
	男				女			
	6歳	11歳	14歳	17歳	6歳	11歳	14歳	17歳
平成2年度	21.5	38.0	54.2	62.0	21.1	38.9	50.2	52.8
平成12	21.8	39.4	55.4	62.6	21.3	40.1	50.7	53.1
22	21.4	38.4	54.4	63.1	21.0	39.0	50.0	52.9
27	21.3	38.2	53.9	62.5	20.8	38.8	49.9	53.0
28	21.4	38.4	53.9	62.5	20.9	39.0	50.0	52.9
29	21.4	38.2	53.9	62.6	21.0	39.0	50.0	53.0
30	21.4	38.4	54.0	62.4	20.9	39.1	49.9	52.9
令和元	21.4	38.7	54.1	62.5	20.9	39.0	50.1	53.0
2	22.0	40.4	55.2	62.6	21.5	40.3	50.2	52.3

令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、他の年度と測定時期が異なっているため、過去の数値と単純比較することはできない。



年間発育量

平成14年度生まれ(令和2年度17歳)の年間発育量をみると、表5のとおり、男子では14歳時、女子では11歳時に最大の発育量を示している。

また、この発育量を親の世代(平成2年度17歳)と比較すると、男子では発育量が最大となる時期は、親の世代より2歳遅く、5歳~11歳、15歳の各歳時で親の世代を上回っている。

女子については、発育量が最大となる時期は親の世代と同じで、5歳、6歳、8歳~11歳、13歳、15歳の各歳時で親の世代を上回っている。

表5 【体重】平成14年度生まれと昭和47年度生まれの者の年間発育量の比較

(単位: kg)

区分		男子		女子	
		平成14年度生まれ (令和2年度17歳)	昭和47年度生まれ (親の世代の17歳)	平成14年度生まれ (令和2年度17歳)	昭和47年度生まれ (親の世代の17歳)
総発育量		43.3	-	34.2	-
幼稚園	5歳時	2.3	1.8	2.4	2.2
小学校	6歳時	2.9	1.9	2.6	1.6
	7	3.2	2.8	2.5	2.9
	8	3.7	2.9	3.9	3.6
	9	3.2	2.8	4.3	4.0
	10	4.4	4.2	4.9	4.7
中学校	11	5.6	4.6	5.3	5.2
	12歳時	5.0	6.5	3.3	4.1
	13	4.7	5.2	3.3	2.8
高等学校	14	5.8	5.9	0.6	2.4
	15歳時	1.7	1.3	2.4	0.7
	16	0.8	2.1	-1.3	0.0

注)年間発育量とは、例えば、平成14年度生まれの5歳時の年間発育量は、平成21年度調査6歳の者の体重から平成20年度調査5歳の者の体重を引いたものである。

図9 【体重】平成14年度生まれと昭和47年度生まれの者の年間発育量の比較(男子)

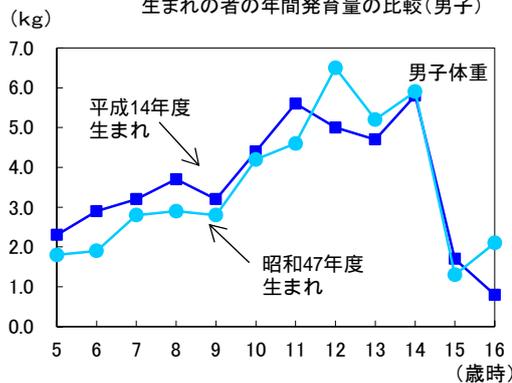
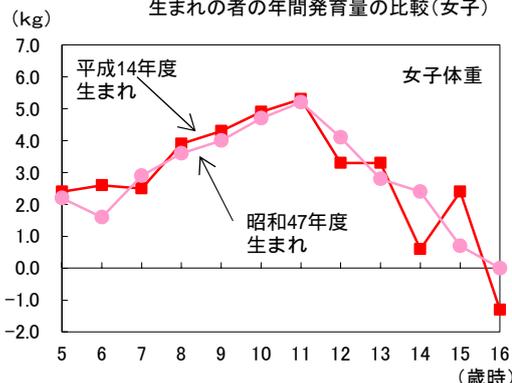


図10 【体重】平成14年度生まれと昭和47年度生まれの者の年間発育量の比較(女子)



健康状態

1 疾病・異常の被患率状況

疾病・異常の被患率を段階別にみると、表6のとおりである。

疾病・異常の被患率の中で高いものは、裸眼視力1.0未満で、中学校54.9%、小学校38.7%、むし歯(う歯)は、小学校47.8%、高等学校44.5%、幼稚園38.9%、中学校27.4%の順となっている。

表6 疾病・異常の被患率 (単位：%)

区分	幼稚園	小学校	中学校	高等学校					
90%以上									
80%以上～90%未満									
70%以上～80%未満									
60%以上～70%未満									
50%以上～60%未満			裸眼視力1.0未満	54.9					
40%以上～50%未満		むし歯(う歯)	47.8	むし歯(う歯)	44.5				
30%以上～40%未満	むし歯(う歯)	裸眼視力1.0未満	38.7						
20%以上～30%未満				むし歯(う歯)	27.4				
10%以上～20%未満		鼻・副鼻腔疾患	11.0						
1%以上 ～ 10%未満	8%以上～10%未満		歯・口腔のその他の疾病・異常 耳疾患	9.2 8.2	鼻・副鼻腔疾患	9.1			
	6%以上～8%未満		その他の疾病・異常	6.2	その他の疾病・異常	6.0	鼻・副鼻腔疾患 歯垢の状態 歯肉の状態 歯列・咬合	7.9 7.2 6.8 6.5	
	4%以上 ～ 6%未満	鼻・副鼻腔疾患 歯・口腔のその他の疾病・異常	4.8 4.3	歯垢の状態	4.0	歯列・咬合 歯・口腔のその他の疾病・異常 耳疾患 心電図異常 歯垢の状態	5.4 5.4 4.7 4.2 4.0	その他の疾病・異常	5.5
	2%以上 ～ 4%未満	歯列・咬合 その他の疾病・異常 ぜん息 アトピー性皮膚炎 耳疾患	3.8 2.6 2.4 2.2 2.0	心電図異常 歯列・咬合 眼の疾病・異常 ぜん息 栄養状態	3.8 3.6 3.1 2.7 2.0	歯肉の状態 眼の疾病・異常 せき柱・胸郭・四肢の状態	3.7 2.7 2.6	心電図異常 歯・口腔のその他の疾病・異常 栄養状態 眼の疾病・異常 耳疾患 せき柱・胸郭・四肢の状態	3.6 3.0 3.0 2.4 2.2 2.2
	1%以上 ～ 2%未満	その他の皮膚疾患 心臓の疾病・異常	1.2 1.2	歯肉の状態 アトピー性皮膚炎 せき柱・胸郭・四肢の状態	1.9 1.9 1.3	栄養状態 蛋白検出の者 ぜん息 アトピー性皮膚炎 心臓の疾病・異常	1.9 1.6 1.6 1.3 1.0	ぜん息 アトピー性皮膚炎 蛋白検出の者	1.9 1.8 1.5
	0.5%以上 ～ 1%未満	口腔咽喉頭疾患・異常 栄養状態 蛋白検出の者 言語障害	0.9 0.6 0.5 0.5	口腔咽喉頭疾患・異常 難聴 心臓の疾病・異常 言語障害	0.7 0.6 0.6 0.5	尿糖検出の者	0.6	心臓の疾病・異常	0.6
	0.1%以上 ～ 1%未満	眼の疾病・異常 せき柱・胸郭・四肢の状態 顎関節 歯垢の状態 腎臓疾患 歯肉の状態	0.4 0.3 0.2 0.2 0.2 0.1	その他の皮膚疾患 蛋白検出の者 腎臓疾患 顎関節 尿糖検出の者	0.4 0.3 0.2 0.1 0.1	口腔咽喉頭疾患・異常 難聴 その他の皮膚疾患 顎関節 腎臓疾患 言語障害	0.3 0.2 0.2 0.1 0.1 0.1	難聴 顎関節 その他の皮膚疾患 口腔咽喉頭疾患・異常 尿糖検出の者 腎臓疾患 言語障害	0.3 0.3 0.3 0.2 0.2 0.2 0.1
	0.1%未満		結核の精密検査対象者	0.0	結核の精密検査対象者	0.0			

注) 1 「口腔咽喉頭疾患・異常」とは、アデノイド、へんとう肥大、咽喉炎、喉頭炎、へんとう炎、音声言語異常等のある者をいう。
 2 「歯・口腔のその他の疾病・異常」とは、口角炎、口唇炎、口内炎、唇裂、口蓋裂、舌小帯異常、だ石等のある者をいう。
 3 「心電図異常」とは、心電図検査の結果、異常と判定された者である。
 4 「その他の皮膚疾患」とは、伝染性皮膚疾患、毛髪疾患等、アトピー性皮膚炎以外の皮膚疾患と判定された者である。
 5 「その他の疾病・異常」とは、いずれの調査項目にも該当しない疾病・異常の者である。

2 主な疾病・異常の推移

疾病・異常のうち主なものの推移は、表7のとおりである。

表7 主な疾病・異常の推移

(単位：%)

	区 分	裸 眼 視 力 1 ・ 0 未 満 の 者	耳 疾 患	鼻 ・ 副 鼻 腔 疾 患	む し 歯 (う 歯)	心 電 図 異 常	蛋 白 検 出 の 者	ぜ ん 息
幼 稚 園	平成22年度	X	5.4	2.0	59.3	...	0.7	1.3
	28	X	1.9	8.9	47.7	...	2.9	2.7
	29	X	1.5	2.0	48.4	...	-	3.2
	30	X	3.8	3.8	44.3	...	0.6	0.8
	令和元	X	2.3	4.2	X	...	0.2	1.8
	2	X	2.0	4.8	38.9	...	0.5	2.4
小 学 校	平成22年度	31.9	6.0	14.4	64.5	3.9	0.6	3.2
	28	33.6	6.3	10.9	56.2	3.5	0.5	3.7
	29	34.1	6.5	12.7	54.5	3.5	0.7	2.5
	30	38.1	6.0	13.7	53.1	3.3	0.3	4.3
	令和元	37.8	7.0	12.6	51.8	3.8	0.3	2.9
	2	38.7	8.2	11.0	47.8	3.8	0.3	2.7
中 学 校	平成22年度	55.9	4.9	12.9	48.1	5.0	1.5	2.1
	28	55.2	3.6	10.8	34.9	4.4	1.3	1.6
	29	53.6	3.5	10.6	35.1	2.7	2.3	1.7
	30	52.3	4.9	13.1	37.3	4.1	1.5	1.9
	令和元	57.6	4.9	12.1	30.9	3.8	1.2	1.8
	2	54.9	4.7	9.1	27.4	4.2	1.6	1.6
高 等 学 校	平成22年度	64.8	1.8	12.7	69.5	5.4	2.6	1.7
	28	X	2.3	11.1	53.7	5.0	2.6	1.5
	29	X	2.5	13.0	50.0	5.1	1.5	1.7
	30	63.0	2.3	9.7	48.3	3.7	0.8	1.8
	令和元	70.6	1.9	10.2	46.7	5.0	1.5	2.0
	2	X	2.2	7.9	44.5	3.6	1.5	1.9

(1) むし歯(う歯)

むし歯(う歯)の者を、「処置完了者」と「未処置歯のある者」に区分すると、表8のとおりである。

むし歯(う歯)の被患率は、幼稚園38.9%(全国30.3%)、小学校47.8%(全国40.2%)、中学校27.4%(全国32.2%)、高等学校44.5%(全国41.7%)となっており、幼稚園、小学校、高等学校で全国平均を上回っている。

10年前(平成22年度)と比較すると、幼稚園では20.4ポイント、小学校では16.7ポイント、中学校では20.7ポイント、高等学校では25ポイント低くなっている。

表8 むし歯(う歯)の処置完了状況等の推移

(単位：%)

区 分		年 度						全 国 (R 2)
		H22	28	29	30	R 1	2	
幼 稚 園	計	59.3	47.7	48.4	44.3	X	38.9	30.3
	処置完了者	20.2	17.8	19.8	18.2	X	16.5	12.7
	未処置歯のある者	39.1	29.9	28.6	26.1	X	22.4	17.7
小 学 校	計	64.5	56.2	54.5	53.1	51.8	47.8	40.2
	処置完了者	26.6	25.7	24.2	24.1	24.4	22.7	20.6
	未処置歯のある者	37.8	30.5	30.3	29.0	27.4	25.1	19.6
中 学 校	計	48.1	34.9	35.1	37.3	30.9	27.4	32.2
	処置完了者	27.1	18.1	18.2	19.7	16.0	14.7	18.8
	未処置歯のある者	21.0	16.8	16.9	17.7	14.9	12.7	13.4
高 等 学 校	計	69.5	53.7	50.0	48.3	46.7	44.5	41.7
	処置完了者	34.4	27.1	27.0	26.8	23.8	23.4	25.0
	未処置歯のある者	35.1	26.6	23.0	21.5	22.9	21.1	16.6

(2) 裸眼視力1.0未満の者

裸眼視力1.0未満の者を、視力で区分すると表9のとおりである。

裸眼視力1.0未満の者の割合は、小学校38.7% (全国37.5%)、中学校54.9% (全国58.3%) となっており、小学校で全国平均を上回っている。

10年前 (平成22年度) と比較すると、小学校では6.8ポイント高くなっており、中学校では1.0ポイント低くなっている。

幼稚園、高等学校は数値が秘匿のため、全国及び10年前との比較はできない。

表9 裸眼視力1.0未満の者の推移

(単位 : %)

区 分 \ 年 度		H22	28	29	30	R1	2	全 国 (R 2)
		幼 稚 園	計	X	X	X	X	X
	1.0未満0.7以上	X	X	X	X	X	X	21.1
	0.7未満0.3以上	X	X	X	X	X	X	6.1
	0.3未満	X	X	X	X	X	X	0.7
小 学 校	計	31.9	33.6	34.1	38.1	37.8	38.7	37.5
	1.0未満0.7以上	11.8	12.0	12.0	13.2	13.3	14.0	12.7
	0.7未満0.3以上	11.8	12.7	12.8	13.8	13.7	13.7	13.9
	0.3未満	8.4	8.9	9.3	11.1	10.8	11.0	10.9
中 学 校	計	55.9	55.2	53.6	52.3	57.6	54.9	58.3
	1.0未満0.7以上	9.6	10.5	9.3	9.9	11.2	12.5	13.5
	0.7未満0.3以上	17.8	16.4	15.8	17.8	14.3	16.2	19.4
	0.3未満	28.5	28.4	28.4	24.6	32.2	26.2	25.3
高 等 学 校	計	64.8	X	X	63.0	70.6	X	63.2
	1.0未満0.7以上	X	X	X	7.9	9.5	X	13.5
	0.7未満0.3以上	X	X	X	13.7	13.5	X	18.1
	0.3未満	X	X	X	41.3	47.7	X	31.5

(3) 心電図異常

小学校、中学校及び高等学校の各第1学年において、心電図検査の異常を調査した。
各学校段階の心電図異常の割合は、表10のとおりである。

表10 心電図異常の推移

(単位：%)

区 分	佐 賀 県					全 国				
	H28	29	30	R 1	2	H28	29	30	R 1	2
小 学 校 1 年	3.5	3.5	3.3	3.8	3.8	2.4	2.4	2.4	2.4	2.5
中 学 校 1 年	4.4	2.7	4.1	3.8	4.2	3.3	3.4	3.3	3.3	3.3
高等学校1年	5.0	5.1	3.7	5.0	3.6	3.4	3.3	3.3	3.3	3.3